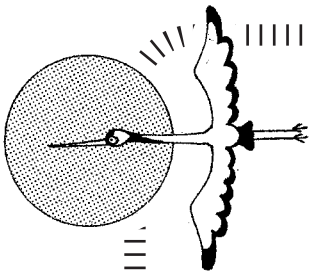
公民館の図書室は　学びの入口・みんなの本棚

図書室月報

2024年（令和6年）1月5日
第728号

国立市中1－15－1
TEL.042-572-5141
FAX.042-573-0480
国立市公民館



＜アンケート特集＞

2023年 印象に残った本

公民館図書室利用者・講座参加者の方に、
「今年印象に残った本」アンケートに答えていただきました。
皆さんのおすすめの本をご紹介します。

『ロバのスーコと旅をする』

高田晃太郎（河出書房新社）

裏（ところぎ）由里子

ほっこり心温まるロバとの旅。新聞記者を辞し、イラン、トルコ、モロッコと、ロバとただただ10カ月歩いた旅行記。目的は持たず、潮時が来たと思えばその日がゴール。「こういう旅をしていると、人間の幸せというものが単純で小さなことであることをいつも思い知らされる」と著者は言う。ロバの写真も掲載されており癒される。慌ただしく毎日を過ごしている方にこそ読んでいただきたい一冊。

『パリの味』

増井和子（文藝春秋）

鍛治 勝

フランスに、緑のワインがあるのを、ご存じですか？

「真珠のワイン」「海のワイン」と呼ばれる、辛口のミュスカデというワインです。さわやかな柑橘系の、日本円にして、千円前後の、手ごろなぶどう酒。

パリでは、この緑のワインの肴に、すずきの薄造り、マグロのたたきと海草、生の帆立貝を食べると聞いて、ひっくり返りました。フォークとソースでいただく、刺身の盛りあわせ。パリのレストランに、乾杯です！

『ヒエログリフを解け ―ロゼッタストーンに挑んだ英仏ふたりの天才と究極の解読レース』

エドワード・ドルニック（東京創元社）

新田 雅司

ヒエログリフを解読したヤングとシャンポリオンの挑戦を臨場感豊かに語る。ヤングは、王の名に注目して部分的な解読に成功するが、そこ止まり。が、シャンポリオン、独習した古代エジプト語や中国語の知識も活用し、表意文字風なヒエログリフは、実は表音文字であることを見抜き、すべての解読に成功した。戦時暗号ならともかく、いったい何が書いてあるのかさえ不明なヒエログリフに、ITの助けもなしに挑んだ執念に感動。

『美は乱調にあり』

瀬戸内寂聴（岩波現代文庫）

向井 誠一

作品のタイトルは無政府主義者と云われた大杉栄の言葉に由来する。当作においては彼及び周辺人物たちの乱調ぶりが事細かに描かれている。実はこの言葉は〝階調は偽りである。〟とのフレーズと対を成している。確かに階調は情緒且刹那的な高揚感を欠くが、代わって深い洞察・怜悧な判断計算を要件とする。ただ重要な指摘がある。乱調が大杉や周辺人物の専売ではなかった事である。大正以降の時代は明治が苦心の末に手に入れた数々を更に実りあるものにするべく託された時代であった。しかし、そうはならなかった。むしろ逆であった。恐らく多くの人々に情緒的傾斜が共有されていた為なのであろう。その意味では大正という時代は先鞭を担ったのでもあった。

『チボー家の人々』

ロジェ・マルタン・デュガール
山内義雄訳（白水社）

大井　利雄

１９２２年から１９４０年まで18年をかけて発表された大河小説で、８部11巻からなる。『１９１４年夏』に対して１９３７年のノーベル文学賞を受賞した。

カトリックの富裕な実業家の家であるチボー家の子息アントワーヌおよびジャック、ジャックの友人でプロテスタントの家庭の息子であるダニエルの３人の少年が中心。彼らの青春を通じて第一次世界大戦期10年間のヨーロッパにおけるブルジョワ社会や思想状況が描かれていく。真面目なアントワーヌは医師として堅実な道を歩むが、反抗児のジャックは、作家となり、やがて革命運動に身を投じる。第一次世界大戦が勃発し、ジャックはビラ撒きの飛行機が墜落して重傷を負って殺され、アントワーヌは毒ガスによって虫の息となり、日記に、体験と希望を記す。

現代に通じる警句はいくつも提示されている。ウクライナ、パレスチナの紛争も、民族、宗教の闘争が深淵にあり「社会制度が新しくなっても、人の本性という基本的要素は変わらない」の言葉につきる。

『馴染み知らずの物語』

滝沢カレン
（ハヤカワ新書）

中井　あつし

モデル、タレントの滝沢カレンさんは、父がウクライナ人。ご本人は日本生まれ日本育ちで、日本語以外は話せませんが、「日本語が上手くない」というキャラながら、書くこと、物語を考えることが大好きです。

この本では世界の名作のタイトルと少しのヒントを元に、滝沢さんが独自の物語十五作を創作しています。

ザムザは朝起きたら何に『変身』していたか？『ウエルテル』は何に悩んでいるのか？カレン語を楽しみながら読んで下さい。

『むらさきのスカートの女』

（11月くにたちブッククラブ課題図書）
今村夏子（朝日文庫）

中島　千恵子

すっごくおもしろかった。国立市民の皆さん聞きに来なかったのはもったいないよと思いました。文学オンチの私でも楽しめます。目からウロコだよ！

つまらないと思った小説の景色が変わりました。自分の固まった価値観も両肩つかまれて揺さぶられたみたいにコリがほぐれてココチ良いです？

今村夏子さんの他の作品もぜひ読んでみたくなりました。

『算数・数学間違い探し』

芳沢光雄
（講談社＋α新書）

深見　弘

数学を本当に好きになるのは点数が良くて褒められた時ではなく、新しい概念を初めて理解した時や概念を自分のものにして応用例を理解できるようになった時です。

本書は間違い探しにより、暗記では身につかない理解の学びを喚起する本です。

【本書の類題】特売日に通常１０００円の刺身を２割引きの表示価格で売っていた。が、閉店１時間前にさらに表示価格の３割引きのアナウンスがあった。そこで、1000×（1−（0.2+0.3））＝1000×0.5＝500円を出した。正しいでしょうか？

『ＡＢＣ殺人事件』

アガサ・クリスティー
（講談社インターナショナル）

岩崎　心暖（しのん）

この本は、名探偵ポアロのお話です。アガサ・クリスティーの本は他にもたくさんのミステリー本がありますが、この本は特におもしろかったです。今回もまた予想外の展開で終わらせてきました。また、この本はポアロの友人目線の日記になっており、今まで読んできたのとは一味違った感じを楽しめました。アガサ・クリスティーのミステリー本はどの本も魅力的なので読んでみてください。

『老いてこそデジタルを』

若宮正子（１万年堂出版）

今村　三郎

著者は、今年89歳になります。しかし、今でも自宅でパソコン教室を開くなど、現役のプログラマー・解説者として活躍しています。しかも、彼女がパソコンを始めたのは、銀行を定年でやめてからだそうですから驚きです。81歳の時、コンピューターゲームを作りました。また２０１８年には国連で講演し、さらには米国アップル社から国際学会で紹介されました。

この本はデジタルのことをやさしく紹介しています。パソコンを使い始めて長い私ですが、そういうことかと、うなずくことがいくつかありました。また「ＡＩスピーカー」など新しいことに触れており、積極的に取り組む著者に脱帽です。

『アナログ』
ビートたけし（新潮社）
田中　優羽

この本は、携帯電話を持たない女性に恋したお話です。その女性とは、ピアノという喫茶店で毎週木曜日に会う約束をしていました。しかし、突然その女性はピアノに来なくなりました。

なぜ急に来なくなったのか、今はメールなどで連絡を取れるありがたさなど、普段気づかないところにも気づかされる作品でした。

『海炭市叙景（かいたんしじょけい）』
佐藤泰志（小学館文庫）
東（あずま）　健太郎

架空の街、海炭市に生きる人々の哀歓を描く。群像小説というのだろうか。これまで佐藤は自分の分身を小説に登場させることが多かったが、この手法だと自分の分身から離れることができ、自由度が増す。14歳の切手収集が趣味の少年から70歳の豚を飼っている女性まで、それぞれの人物が直面する人生における一断面が描かれる。

全般に明るい話が多く、読み進めるのがもったいなかった。

未完と言うがほぼ完成された本作を残せて、佐藤は本望だろう。これを含めて3作しか読んでいないが、多分これが最高傑作であろう。

『ワタシゴト 14歳のひろしま』シリーズ
中澤晶子（汐文社）
『口福のレシピ』
原田ひ香（小学館）
『オール・ノット』
柚木麻子（講談社）
荒井　寿恵

『ワタシゴト』は、私事、渡し事としてヒロシマの歴史を修学旅行で伝える試みとそれに応える中学生一人ひとりの葛藤を描く。『口福のレシピ』は、ある料理学校の生姜焼きレシピにまつわるルーツ探しとその継承の物語。『オール・ノット』は、奨学金を得た大学生が、出会い別れた人たちとの結び目（KNOT）の作り方を学ぶ20年程を描き、その先の希望ある未来も予感させる。YA向けの本は、読むと元気がでる。

①『鎌倉の名建築をめぐる旅』
内田青蔵＋中島京子（エクスナレッジ）
②『アジア・中東の紋様と装飾』
海野弘（パイインターナショナル）
黒川　祐子

①鎌倉に出かけるなら神社仏閣巡り？海へ？江の島へ？どこもステキですが、少し目先を変えて近代の建築巡りはいかがでしょうか？この本では江戸時代の民家、明治・大正の洋館、文人が凝った家、戦後のモダン建築などがきれいな写真で案内されています。駅から1分のホテル、鶴岡八幡近辺の美術館、浄明寺奥のレストランほか由比ガ浜通りを散歩がてら訪ねてみたい文学館。鎌倉散歩の楽しみをもう一つ増やしてくれる本です。

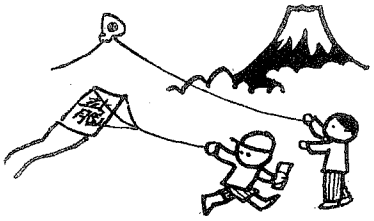
②本を開く前から表紙一面の繊細な模様に惹かれます。書名では気付かなかったのですが、この本ではシルクロードを西へ東へ伝わった文明とその表現形である陶磁器、絵画、染色や刺繍などの品々に現れた紋様と装飾がとりあげられ、合わせて隊商都市、イスラム建築、仏教やヒンズー教の寺院遺跡がきれいな写真で紹介されています。千数百年にわたる、七千キロ以上の歴史の旅路を装飾紋様の視点でたどってみるのはいかがですか。

『あの花が咲く丘で、君とまた出会えたら。』
汐見夏衛（スターツ出版文庫）
白井　海月

家や学校に毎日不満を抱えている中学生の少女。ある日母とのけんかで家をとびだし、近くにあった防空壕で一夜を過ごすことにした。朝起きると少女は戦争中の日本にタイムスリップしてしまっていた。戦争中の世界との出会い、ある少年との出会い、この2つの出会いで少女の心は動いていった。命とは何かと一度考えられる機会になると思います。涙が止まらない最後、あなたは、なにを思いますか？

『ドイツ人が語るドイツ現代史』
ドミニク・ゲッパート
進藤修一・爲政雅代訳
（ミネルヴァ書房）
宮武　光吉

ドイツ連邦共和国（西ドイツ）は、１９４９年に成立し、１９９０年に、ドイツ民主共和国（東ドイツ）を吸収・統合しました。現在までこの間に、首相は９人しか交代していません。その間の政治・経済史を簡潔にまとめています。初代のアデナウアーを始め「ドイツ再統合」を目指して、国力の進展に注力し、目的を達成した歴史がよくわかりました。ちなみに、戦後のわが国では35人の首相が就任しています。



①『個人的な体験』
大江健三郎（講談社）
②『ヒロシマ・ノート』
大江健三郎（岩波書店）
③『晩年様式集（イン・レイト・スタイル）』
大江健三郎（講談社）

関　美智子

今年3月3日、86歳で生涯を閉じた大江健三郎の作品を読了。著者の作品の中から右記三点を是非お勧めしたい。著者の人間味あふれる人柄をこの際心に焼き付けてと願いながら……。

①は瀕死のわが子を前に、絶望する当事者となって、動揺する若い父親が、希望に顔を向けるまでの出来事を凝縮した作品に。

②は自分を傍観者とわきまえ、重藤文夫原爆病院長ら現地で奮闘する人々を訪ね歩き、被曝者それぞれに深まりゆく慟哭を書き、広く世界へ伝えるため、ルポルタージュの文章化に徹している。

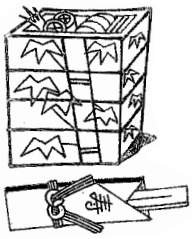
③は最後の小説。語りは時に妻、妹、娘にまかされ、それが自分を批判するという見事な組立て。最終章のタイトル《私は生き直すことができない。しかし私らは生き直すことができる。》が、詩の末尾に置かれ、印象的な作品となっている。世界に光が放射し、明るさが見えて来る予感が宿った瞬間であった。

『ロスジェネの逆襲』
池井戸潤（ダイヤモンド社）

後藤　優奈

この本は、有名な半沢直樹シリーズの第三弾です。東京中央銀行から子会社の東京セントラル証券に飛ばされた半沢直樹。そこにある大きな案件が舞い込みますが、親会社である東京中央銀行に横取りされてしまいます。責任を問われた半沢は、部下の森山とともにある秘策に出るというあらすじです。

銀行の話なので難しいところはあるけれど、分かりやすくて引き込まれる内容なのでぜひ読んでみてください。



新着図書から

〈哲学　心理学　宗教〉
日本精神史　近代篇上・下　長谷川宏（講談社）121

〈歴史〉
関東大震災絵図　北原糸子（東京美術）210
鉄道と戦争　内海愛子（明石書店）210
海を渡った「ナパーム弾の少女」　藤えりか（岩波書店）289
ランキングマップ世界地理　伊藤智章（筑摩書房）290
ニュージーランドを旅する46章　宮本忠（明石書店）297

〈社会科学〉
2020年代の想像力　宇野常寛（早川書房）361
女性の自立をはばむもの　いのうえせつこ（花伝社）367い
「ひきこもり」の30年を振り返る　石川良子（岩波書店）367い
はじめてのフェミニズム　デボラ・キャメロン（筑摩書房）367キ
生き延びるための女性史　山家悠平（青土社）367や
発酵食品と戦争　小泉武夫（文藝春秋）383

〈産業〉
山下惣一百姓の遺言　山下惣一（家の光協会）610
ジェンダー目線の広告観察　小林美香（現代書館）674
秘境駅への旅　吉永陽一（交通新聞社）686

〈文学〉
大江健三郎同時代論集1～6　大江健三郎（岩波書店）91お
女も戦争を担った　川名紀美（河出書房新社）91か
窓ぎわのトットちゃん　続　黒柳徹子（講談社）91く
旅のことばを読む　小柳淳（書肆梓）91こ
歌わないキビタキ　梨木香歩（毎日新聞出版）91な
リスペクト　ブレイディみかこ（筑摩書房）91ブ
武蔵野詩抄　正津勉編・解説（アーツアンドクラフツ）911し
一冊で読む日本の近代詩500　西原大輔（笠間書院）911に
風とマルス　花山周子（青磁社）911は
林立　花山周子（本阿弥書店）911は

◆ 図書室内の工事のお知らせ ◆

２０２４年１～３月、公民館の図書室内で工事を行う予定です。
利用者の皆さまの安全に配慮して工事を行います。工事の日程につきましては、決まり次第、館内掲示などでお知らせします。開館を維持しながら工事を行うため、ご不便、ご迷惑をお掛けしますが、ご理解をお願いいたします。

【図書室　段差解消機工事】

工事期間中（数日間）、作業で使用する機械の音が発生します。
また、段差解消機周辺は立入禁止となり、図書室内に作業員が出入りします。

ブッククラブから

今村夏子『むらさきのスカートの女』―補色関係―

大山　葉子

タイトルの『むらさきのスカートの女』が何故むらさきなのか、誰もが思う事だろう。紫ではなくむらさき、と平仮名である事はさておき、赤や青のように、むらさき色は性別に関係しない色なので、男女のどちらでもあり得ると考える事も出来る。スカートは女性性の記号だが、そこにはむらさき色でなければならない理由が、何かある筈である。

しかし、この小説の語り手は黄色いカーディガンの女で、彼女の目を通してむらさきのスカートの女の日常が語られる。この語り手は、何故かやたらとこのむらさきのスカートの女と友達になりたがっており、策を弄するも失敗。経済的に破綻をきたし、万が一に備え夜逃げの準備までしている。だが、不思議と悲壮感も惨めさもなく、むしろ冷徹である。とは言え人の事に構っている場合ではないと思うのだが、失業中のむらさきの女を、自身の職場であるホテルの清掃業に就職させる。かと言って友達になるわけでもなく、ただひたすらむらさきのスカートの女の一挙一動を観察し、探偵の如く後までつける。だが、むらさきのスカートの女の方は、一向に気が付かないのが不思議である。

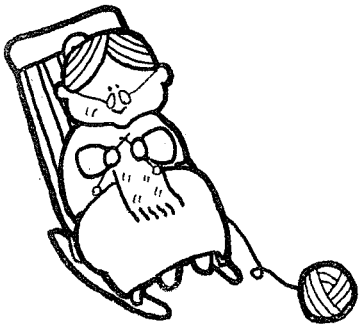
職場では、スタッフの誰かがホテルの備品を横流ししているらしい事が判明。犯人捜しが始まるあたりは、探偵小説の趣き。むらさきのスカートの女が疑われ、自宅アパート二階の玄関先で職場の所長に自供を迫られ押し合いとなり、廊下の錆びた手すりにぶつかった所長が地面に転落。何故かそこへ黄色いカーディガンの女が登場。所長の死を告げ、むらさきのスカートの女に逃亡の手順や潜伏先を指示。ここで私の頭の中ではてなマークが飛び交い、ふと我に返る。この話の全ては、黄色いカーディガンの女が創り出した一種の妄想なのでは、と。ブッククラブ当日、参加者の一人も言及されていたが、黄色いカーディガンの女は「信頼出来ない語り手」なのではないか。

結局、むらさきのスカートの女は何処かに消え失せてしまい、死んだ筈の所長は骨折こそすれ無事。大体、錆びた手すりがそう簡単に折れるとは思えないし、もし折れたなら何か細工がしてあったに違いないのだ。またホテル備品の横流しは黄色いカーディガンの女の仕業である様な事が、最初の方で伏線として語られていて、推理小説の様に巧みだ。

黄色いカーディガンの女である語り手は、むらさきのスカートの女の存在を妄想する事で精神のバランスを保って来れたのだろう。むらさきと黄色が補色で、互いに引き立て合う色である事に、２人の関係が表され象徴されていると思う。むらさき色は古今東西、特別な意味を持つ色でもあった。

余談だが、私もホテルで働いた経験があるのだが、この小説の中での様な事は一切なく、スタッフは皆、真面目で気持ちの良い人達であった事を記しておきたい。

（朝日文庫）



くにたちブッククラブ

―記憶の欠片をひろい集めて―

小川洋子『約束された移動』
（河出文庫）

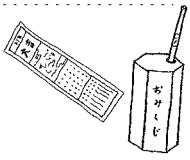
講　師　　小平（おだいら）　麻衣子（まいこ）
（慶應義塾大学・日本近代文学）

と　き　　1月18日（木）
夜7時半～9時半

ところ　　公民館 3階講座室

申込先　　公民館　☎（572）5141

＊今年度のブッククラブは今回が最終回です。
＊当初と日程、部屋を変更しています。



図書室のつどい

あなたもハマる!? 数学ひらめきクイズ

お話　横山 明日希（あすき）
（株式会社 math channel 代表取締役）

数学を用いた様々な楽しいクイズに挑戦してみましょう。「数学は苦手……」という方でも大丈夫！今回は、「〝体験〟を通して算数・数学をもっと身近な学びに」を理念に掲げる、算数・数学コンテンツ企画・制作会社 math channel の代表である横山さんをお呼びし、算数・数学クイズをやさしく解説して頂きます。難しい数学の知識は不要です。クイズを解きながら、数学の不思議さ、面白さに触れてみましょう。

（小学生も参加可能　※４年生以上推奨）

お試し問題

６本の缶をなるべく短いロープで結ぶとしたら、どのような結び方がよいでしょうか。

〈横山さんの本〉『はまると深い！数学クイズ』（ブルーバックス）、『文系もハマる数学』（青春出版）ほか。

とき　1月27日（土）
　　昼2時～4時
ところ　公民館　地下ホール
定　員　40名（申込先着順）
申込先　1月10日（水）朝9時～
　　公民館　☎042(572)5141

〈私の本棚から　第４回〉

S・J・ローザン著　直良和美 訳『チャイナタウン』から『その罪は描けない』

山下 幸代（さちよ）

私は、通勤や旅行などで乗り物を利用する時には、いつも文庫本を一冊、バッグに入れていた。主に探偵小説だが、それで辛い時間も楽しみになった。シリーズものも多く、長く楽しむことができた。デボラ・クロンビーの警視シリーズ、スー・グラフトンの探偵シリーズ、パトリシア・コーンウェルの検屍官シリーズ等。他にも、五十話を超えるシリーズもあるが、新刊が出ると思わず手に取ってしまうのは、古くからの友人に久し振りに会ううれしさに似ているように思う。

中でも、探偵リディア・チン＆ビル・スミスシリーズは、私の好きなものだ。

ニューヨーク、チャイナタウンのアパートに母と住む二十代後半のリディアは、親の代から中国人移民で小柄だが、テコンドーの遣い手。両親のおかげもあり中国人社会から信頼もある。一方、四十過ぎのアイルランド系のビルは、身長六フィート余の大男だが、ピアノ演奏を好み、美術にも造詣が深い。見た目はまったく違う二人だが、私立探偵の良きパートナーとして信頼し合っている。特徴として、一話ごとに主役がどちらかに変わるのだが、もう片方が相棒として登場する。

例えば、リディアが主役の時は、母親から「早く結婚しろ、兄たちに迷惑かけるな」と文句を言われ、朝食におかゆを作ってもらい、やはり飲み物は、様々なお茶。やはり中国人社会の中での仕事が舞い込むことが多い。

他方、ビルは美術品盗難などに力を発揮する。勿論、飲み物はコーヒー。

二人の共通する点は、仕事を依頼されると、関係者の所へ赴き、じっくり話を聞き、真実に向かってこつこつと調べていく。自分から決して、うそやはったりは言わない。精神的に問題がある依頼者にさえ、「ビルはうそをつかない男だから。」と言わしめる。

ストーリーの展開は緩やかで、スピード感に欠ける印象もあるが、読者も主人公達と一緒に事件の現場や聞き込みに同行しているような描写の細かさが魅力的だ。途中出てくる道路やカフェの名前も実名らしく、コーヒーやお茶と一緒に出されるスイーツにも心引かれる。

作品数はそう多くないが、三十年近く続くこのシリーズを愛する読者も多いらしい。

（創元推理文庫）

係から

『今年印象に残った本』について、たくさんの方が原稿を寄せてくださったおかげで、年の初めに華やかな紙面にすることができました。誠にありがとうございました。気になる本がありましたら、ぜひ読んでみてください。